

縄文の世界・世界の縄文

ー青森県における縄文研究拠点形成と情報発信の考察ー

長岡朋人
青森公立大学

1. はじめに

2021年に北海道・北東北の縄文遺跡群は世界遺産に登録された。2024年には青森市に縄文遺跡群情報発信拠点施設「じょもじょも」が設立され、縄文遺跡の魅力を伝える出土品や映像を通して観光客に情報を提供する場が整備された。青森県は縄文遺跡を代表として世界に誇る文化遺産を有しており、近年では縄文遺跡の価値を高めようという動きは顕著であるが、現在の教育・研究・普及は十分のものであろうか。本研究では現状の課題を整理し、青森県が世界に誇る縄文遺跡を地域の活性化にどのように活用すればよいか、次世代の教育を踏まえた長期的視点から考察を行う。

2. 課題の抽出

青森県では縄文遺跡は情報発信や一般への啓蒙活動に注力している点は注目されるが、下記の理由から縄文遺跡の価値を十分に引き出すには至らない。

第一に、縄文の研究は近年大きく進展しており、縄文の魅力発信は日々更新される研究を踏まえた活動であるべきである。縄文時代の世界観は過去数十年に変化してきたが、今回国内外の先行研究を踏まえた動向を後述する。

第二に、縄文遺跡の魅力発信の手法は適切かという点である。発信のほうに主眼が置かれて、メッセージ性が乏しい現状を危惧する。縄文遺跡のアピールを見ても、そこには意外性がなく、世界の考古学の現状から取り残された縄文観（縄文時代を理想郷とした縄文至上主義）に終始する可能性がある。縄文文化は他の時代や文化と比べて優れているという面を強調する姿勢は現代の物差しで過去を判断するという後付けの説明である。

第三に、海外の訪問者や専門家を含めて、青森県に訪問する多様な人々に向けた魅力発信であるかという課題である。縄文研究の情報を更新され続けなければいけないが、それがないと専門家の人から振り向かれない可能性がある。

以上から、文化遺産に関する先進的研究の推進と地域への還元は急務である。遺跡や文化財に関わる地域おこしはSNSを通じたアピールが多いが、世界に誇るべき研究成果を生み出す土壌がなくては将来を見据えた活動へつながっていかない。研究活動による先進的な知見と次世代を担う世代への教育が優先されるべきである。

3. 目的

本研究の目的は、(1)最先端の研究の紹介を通して現時点における縄文の世界観を更新すること、(2)世界の研究者が明らかにした縄文の研究成果を紹介すること、(3)青森県の文化財の関心を高め、将来に向けた遺跡や文化財の保全や新しい研究調査の発展を期待

するため、子どもたちや地元の考古学者に先進的な研究に触れる機会を提供した実践例を紹介することである。縄文遺跡の先進的な研究成果の紹介と理解増進活動は本研究における両輪として位置づけられる。

4. 方法

本研究では、著者による先行研究（長岡，2010）だけではなく、American Journal of Physical Anthropology, Journal of Archaeological Science, Anthropological Science 等の人類学や考古学の国際誌に掲載された論文を渉猟し、縄文時代の世界観の移り変わりを紹介する。次に、子どもたちや地元の考古学者に先進的な研究に触れる機会として、2024 年青森公立大学公開講座「縄文と世界の遺跡を比較する」（青森公立大学主催）、2021 年「サイエンスカフェ」（青森公立大学長岡ゼミ主催）における活動例を紹介する。本研究は、著者が過去に行った研究や地域貢献活動を中心にまとめた。

5. 結果と考察

縄文の世界観—最近の研究から—

縄文時代のイメージはこの数十年大きく変化した。狩猟採集を生業とする縄文時代の生活が農耕を生業とする弥生時代と比べて過酷であるというイメージが塗り替えられ、持続可能な社会であったという理想郷というイメージ（たとえば、高橋，2023）に変化した。縄文の世界観の変化のきっかけの一つは三内丸山遺跡から発見された建築物や多様な出土品であることは疑いようもない事実である。

縄文時代の世界観の変化は研究の最前線において顕著である。狩猟採集を生業とする縄文時代の生活の厳しさを支持する研究は 1960 年代を端緒とする。縄文時代の世界観を方向づけた研究の一つは京都大学の小林和正（Kobayashi, 1967）の縄文人の平均余命の研究（縄文人が何歳まで生きられたかという研究）である。小林は人骨から死亡年齢を推定し、縄文時代の集団の年齢構成を求めた。その結果、15 歳時点での平均余命は 16 年程度、すなわち 30 歳ほどしか縄文人が生きられなかった。小林の研究によると、縄文時代には 50 歳を超える世代が皆無であるという。狩猟採集民の生活の厳しさはアメリカの先住民の古人口学的研究でも支持され（Lovejoy et al., 1977）、小林の研究成果は縄文時代の生活の厳しさを示唆する結果として、人類学や考古学の研究者に長らく受け入れられたものである。しかし、古人骨の死亡年齢推定法を改訂し、ベイズ推定を用いた平均余命の研究を行った長岡（2010）は、15 歳時点での平均余命を 30 年程度と修正し、縄文人の短命説を覆した。古人口学的研究は骨の死亡年齢を推定する方法論の前提によって結果が変化しうるものであるが、著者の研究は縄文時代の生活の過酷さを過度に強調した先行研究に修正を迫ったものである。

しかし、この結果は縄文時代が理想郷であったということを意味しない。たしかに、縄文時代の世界観が変化するにしたがって、縄文時代は 1 万年以上の平和を享受した社会であるということが強調されるようになった。縄文時代は弥生時代と異なり組織的な闘争の痕跡が見られない時代である。しかし、縄文人の骨に残る外傷の痕跡から、当時凄惨な個

人間の闘争があったことが示唆されてきた。たとえば、岡山県羽鳥遺跡の頭蓋には刺創が認められ、これは何らかの人為的な暴力が行われた証拠である（平野・海部，2024）。縄文時代は1万年にわたる平和な時代と考えられているが、決して理想郷ではない。ちなみに、同じ時代が長く続いているのは平和であるためでなく、年代が古くなるほど編年の手がかりが少なくなるためである。縄文時代の世界観は理想郷かどうかと単純化して考えることはできず、豊かな物質文化に裏付けられた社会であるゆえに、現代と同様に複雑な社会であると言える。

世界から見た縄文

「縄文」の命名者は19世紀に東京大学のお雇い外国人のエドワード・S・モースである。モースは東京都大田区の大森貝塚の発掘を行ったが、日本には先住民が住んでいたということを実証した研究成果を発表した。大森貝塚の発掘は日本における最初の学術的な発掘調査であった。

明治時代から現代まで、日本人の起源に関する研究の中心は縄文人やアイヌであったが、多くの海外の研究者を引き込みながら研究成果が生み出された。たとえば、Brace (1982)は縄文人と弥生人の歯の大きさの違いから、両者は別系統の人類集団であることを示し、当時根拠があった縄文人が現代日本人の起源になったという説（Suzuki, 1969）を反証した。

興味深いことに、明治時代から現代にかけて、縄文研究に果たした海外の研究者の役割は決して小さなものではなかった。岡山県の津雲貝塚から発掘した縄文人骨に残る多数の傷に関する最近の研究は注目される。その資料は、1世紀以上にわたって多くの研究者の目にさらされてきたものの、傷の部位の三次元解析を行った結果、それがサメによるものであることが分かった（White et al., 2021）。人類学者は誰もが鑑定眼に自信を持っているはずであるが骨から得られる情報は研究者によって異なるのである。およそ1世紀にわたって日本人の研究者がアクセスした資料で誰も気付かなかったことである。

単純に海外の研究者が優れた成果を出しているとは言えないものの、縄文遺跡を世界の狩猟採集社会と比較するグローバルな視点を有している点は評価すべきである。縄文時代の研究史を振り返ると、青森県の縄文遺跡の情報発信や理解増進活動においても海外の遺跡との比較の視点が有意義であると推察される。

縄文と現代を結び付ける接点

縄文遺跡の情報発信は2つの方向性がある。縄文そのものの面白さを伝えることと縄文を通して現代を見通す視座を涵養することである。本研究のこれまでの話題は前者であるが、縄文が現代にどのように結びつくのか。歴史学者は歴史学が現代にどのように役に立つのかを問うことがあるが、その答えの一つは歴史の教訓を現代に生かす循環史観

（Toynbee, 1934-1961）で説明される。しかし、人類学や考古学の研究が現代と接点は歴史的教訓にとどまらない。現代の医学的水準で古代人そのものである骨から過去の病気を明らかにし、病気の進化過程をたどることができる。骨という古代に生きた人の身体その

ものから生老病死を探り，グローバルな気候変動や社会の複雑化などに関連付けて考察できる意外性がある。2022 年のノーベル医学生理学賞は古代ゲノムの研究を行ったスパンテ・ペーボに授与されたが，古代人の研究が現代的意義を持つことを強く印象付けた成果である。

縄文研究が現代と接点を深めるもう一つの場面は自然災害が挙げられる。現在，地球温暖化による災害の激甚化が防災計画の策定の課題となっている。縄文時代は1 万年以上続いていたが決して安定した時代ではなく，気候変動を繰り返し，現代よりも温暖な時代があった。

大橋（2024）は，地理情報システムから青森市の縄文時代の海岸線を復元し，温暖化により縄文海進がもっとも進んだ時期の津波ハザードマップを作成した（図 1）。縄文海進で海岸線が現在の内陸に位置していたとしても，ほとんどの遺跡の分布

が津波浸水想定から外れており，津波浸水想定と重なる集落跡の遺跡はほとんど皆無であり，縄文時代の人々の災害への意識を推察することができた。縄文遺跡は現在の想定を超える災害を推測する基礎資料になる。この分野は災害考古学と呼ばれている分野である。

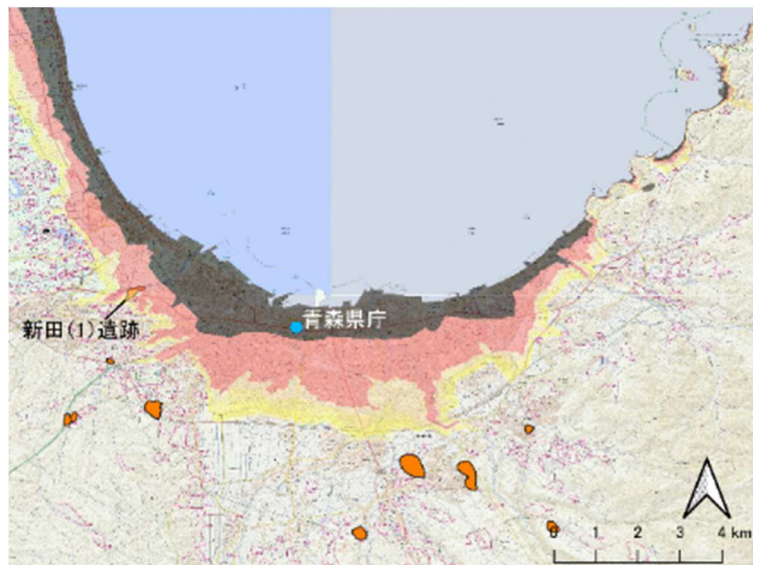


図 1. 縄文早期遺跡地図 縄文海進を考慮した津波浸水想定を示した。遺跡は津波浸水想定から外れた場所に分布している。

縄文遺跡の理解増進活動

今回、研究活動による先進的な知見と次世代を担う世代への教育を行うために、最先端の研究を行っている研究者を青森に招聘し、公開講演会を行った（図2）。本企画は青森学術文化振興財団の研究助成に基づいて行われた公開講演会

「縄文と世界の遺跡を比較する～古病理学の視点～」(オーガナイザー長岡朋人)である。2024年7月20日、21日、27日、28日に実施し、座学だけではなく、模型を用いながら実習形式での講義を取り入れた。

図2.「縄文と世界の遺跡を比較する～古病理学の視点～」のポスター

青森県は縄文遺跡など世界に誇る文化財を持つ。海外の遺跡の調査で世界的な成果を挙げている研究者を招聘し、世界の最先端の人類学や考古学の研究を紹介し、青森県における遺跡や文化財の理解増進の基礎とする。これは、青森県の遺跡を軸に、縄文時代や弥生時代の遺跡、海外の遺跡の調査の最新情報に立ち研究者の語である。本研究のもう一つの軸は古病理学である。古病理学は古代人の骨やミイラそのものから生老病死を明らかにしようとする分野である。本公開講座は、広く世界の遺跡を俯瞰する視座と現代の水事や病気にアクセスする先進性により、青森県の文化財の価値を高めようとする試みである。

司会、コーディネーター：青森公立大学 教授 長岡 朋人

第1回 7/20 (土) 申込締切日 7/16 火
生物考古学とアンデス世界
【講師】青森公立大学 教授 長岡 朋人
【時間】15:00～17:00 (開場 14:30) 【会場】県民福祉プラザ 多目的室4B
【対象】高校生以上 【定員】30名

第2回 7/21 (日) 申込締切日 7/16 火
古病理学から見た原始古代の人々
～健康から過去を探る・現代を考える～
【講師】金沢大学 古代文明・文化遺産学専攻 専任教授 藤田 尚
【時間】10:00～12:00 (開場 9:30) 【会場】県民福祉プラザ 中研修室
【対象】高校生以上 【定員】60名

第3回 7/27 (土) 申込締切日 7/23 火
あもり人骨再発見！
【講師】青森中央学院大学 准教授 藤澤 珠織
【時間】15:00～17:00 (開場 14:30) 【会場】県民福祉プラザ 多目的室4B
【対象】小学生以上 (低学年の方は保護者参加必須) 【定員】30名

第4回 7/28 (日) 申込締切日 7/23 火
弥生時代の人たちとその暮らし
～土井ヶ浜遺跡出土人骨の調査から見えてきたこと～
【講師】土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 学芸員 大藪 由美子
【時間】10:00～12:00 (開場 9:30) 【会場】県民福祉プラザ 中研修室
【対象】小学生以上 (低学年の方は保護者参加必須) 【定員】60名

【会場】県民福祉プラザ
住所：青森市中央 3-20-30
～各回の授業料は別途に申し込みたいと思います。
～お申し込みは下記メールアドレスまで
～お申し込みは下記メールアドレスまで
～お申し込みは下記メールアドレスまで
～お申し込みは下記メールアドレスまで

【申込方法】
裏面をご覧ください。

主催 青森公立大学 <https://www.nebuta.ac.jp/> 共催 青森商工会議所 <https://www.acci.or.jp/>
お問合せ 青森公立大学地域連携センター TEL.017-764-1589 (平日8:30～17:00) 青森公立大学 公開講座

著者は生物考古学とアンデス社会について、

藤田尚（金沢大学）は縄文時代の虫歯に

ついて、藤澤珠織（青森中央学院大学）は青森県の遺跡について、大藪由美子（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）は弥生時代の土井ヶ浜遺跡について、それぞれ異なる視点から話題を提供した。今回の演者は日本国内外の調査で研究成果を挙げている研究者であり、縄文と世界を比較する視座から、青森の文化財の価値を高める意図がある。

長岡、藤田、藤澤、大藪の4回の講演の参加者はそれぞれ25名、24名、17名、18名であった。講演会を行った時期は三内丸山遺跡のさんまる世界遺産ウィークと重なっていたため、定員より参加者は少なめであったが、遺跡の発掘を行ってきた担当者や遺跡のガイドなど、専門家を含めた多くの人が参加した。参加者は10歳代から80歳代まで幅広く、最先端の研究の知見に触れることに強い関心を示すとともに、活発な質疑応答が行われた。研究者の目線での青森の遺跡や文化財のアピールにより、これまでのSNSに局在している魅力発信のあり方を変える試みは参加者の熱心な姿勢から目的を達成したと推察された。青森の将来を担う次世代への教育活動により、地元の文化財の価値を高め、将来に向けた遺跡や文化財の保全や新しい研究調査の発展を見込める。青森県の文化遺産を世界にアピールするためには、文化遺産に関する先進的研究の理解増進活動は必須である。

一方、反省点としては子どもたちや地元の考古学者にも先進的な研究に触れる機会を提供しなかったが、小学生の参加は皆無であったため、子ども向けの企画やいっそうの周知

が必要かもしれない。その点を改善することで、青森県の遺跡や文化財の価値を高める研究成果だけではなく、それを評価できる次世代の人材育成を資する成果が期待できる。

いかに縄文を学ぶか—青森県の博物館に関する課題—

青森県博物館等協議会に加盟している博物館は45ヶ所あるが、そのうち登録博物館4館（青森県立郷土館（休館中）、弘前市立博物館、八戸市博物館、高岡の森弘前藩歴史館）、博物館相当施設3館（青森県立美術館、弘前れんが倉庫美術館、八戸市美術館）がある。博物館は学習施設としての役割があるがそれだけでなくその地域独自のものを守り、次世代につないでいくことも博物館としての施設の役割である。また、地域外の人にも地域の特徴のアピールを行うことができるという利点がある。岩手県の登録博物館は20館、秋田県は7館、北海道は49館と比較しても顕著に少ない。たとえば縄文で、青森県の歴史や文化をアピールしようとしても、その展示、教育、研究を担う登録博物館の数が少ないことは大きな問題である。

青森県の博物館の問題は、登録博物館の数が少ないだけではなく、



図3. サイエンスカフェ実施の光景

く、学ぶ素材はあっても学ぶ機会に欠けるという問題につながる。残念ながら、縄文遺跡の活用は学術面での教育普及活動ではなく商業的な活性化に重点が置かれている。しかし、博物館の建物や展示品がない状態であっても、博物館の機能としての展示、教育、研究の活動が可能な手法としてサイエンスカフェは傾聴に値する。サイエンスカフェとは科学について市民と科学者がコーヒー片手に気軽に話し合うスペースのことである。実験的な試みとして、地域の住民が気軽に集える場所として、むつ市大畑町薬研温泉にあるコミュニティカフェを利用し、人類学をテーマとしたサイエンスカフェを実施した（2021年6月27日）。薬研温泉はかつて下北半島の奥座敷と呼ばれていたが、ホテルの廃業が相次ぎ、かつての活気は失われた温泉地である。下北ジオパークを地域振興に用いようとする機運と組み合わせて地域づくりの意欲を高めるのが目的である。サイエンスカフェのテーマは下北に住むニホンザルの生態や進化について、実際の標本を用いて、地域の子どもたちに研究の最前線に触れる機会を提供した。青森公立大学地域みらい学科の長岡ゼミの学生がファシリテーターを担当し、進行やクイズの出題を行って、講演者と参加者の距離を縮める役割を担った（図3）。

参加者は3家族7名（小学生2名、中学生1名、大人4名）、子どもの学年は小学校2

年生，3年生，中学校3年生であった。満足度は満足が1家族，やや満足が1家族，普通が1家族，難易度は難しいが2家族，ちょうどよいは1家族であった。学生のクイズ企画の難易度は3家族ともちょうどよいものであった。サイエンスカフェの募集方法についてはインターネット（3家族）や学校への掲示（2家族）という希望が寄せられた。アンケートの自由意見として，「大変楽しかったです。クイズや骨に触れながらの内容で子どもも電池が切れるくらい集中していました。ありがとうございました。」，「子供たち向けのサイエンスカフェには少し長かった気がします。一方向だったのでせつかくのカフェ企画ならもう少し参加型にしたほうが面白かったと思います。」，「少し難しい言葉などでたので小学生は分からないかもしれない。とても面白かった。」が寄せられた。

本研究で行ったサイエンスカフェは地域の子どもたちを集め，標本の展示や教育活動を行うという点で，博物館の役割を意識した試みとなった。サイエンスカフェは縄文遺跡をテーマとした研究に展開可能であり，青森県の縄文遺跡の価値を高める機会になりうるものである。縄文時代の人類学や考古学の先進的な研究と理解増進活動により，青森県の縄文遺跡の可能性を最大限に引き出すことができる。青森県は縄文を学ぶ素材に恵まれていても，私たちは学ぶ機会を失っている。青森県つがる市木造亀ヶ岡遺跡の遮光器土偶は重要文化財に指定されている日本を代表する土偶であるが，東京国立博物館に足を運ばなければ目にすることができない。残念ながら地元では見ることはできない。文献を読んだり写真を見たりすることは実物を観察する説得力には遠く及ばない。青森県において登録博物館が少ないという弊害が地元の文化遺産を学ぶ機会の減少を引き起こしている。

6. 結論

本研究は，最先端の研究の紹介を通して縄文の世界観を更新し，世界の研究者が明らかにした縄文の研究成果を紹介した。次に，子どもたちや地元の考古学者に先進的な研究に触れる機会を提供した実践例を紹介し，将来に向けた遺跡や文化財の保全や次世代の人材の養成を意識した活動を紹介した。これらの活動は青森公立大学地域みらい学科の地域貢献活動として行われたものであり，縄文時代の先進的な研究を踏まえたアウトリーチプログラムのアイディアを提示したものである。縄文の研究は過去を知ることだけではなく，病気や自然災害を例に，現代を見通す視座を涵養する素材になる。また，縄文の情報発信は商業的な発信だけではなく，先進的知見やグローバルな視点から青森の文化遺産を保全・活用する契機になる。本研究は長年海外の遺跡調査に携わった著者による縄文に関する先進的研究の紹介と情報発信の考察である。

謝辞

青森公立大学長岡ゼミの大橋駿氏，新谷結彩氏，永野向日葵氏にはゼミの活動のご支援を賜った。青森公立大学学長神山博先生には教育・研究・地域貢献活動に多大なるお力添えを賜った。深く御礼を申し上げたい。本研究の一部は令和6年度青森学術文化振興財団の研究助成を受けた。

参考文献

- Brace C.L., Nagai M. (1982) Japanese tooth size: past and present. *American Journal of Physical Anthropology*, 59: 399-411.
- 平野力也, 海部陽介 (2024) 縄文時代人骨における人為損傷の新報告と既存 3 例の再検討. *Anthropological Science (Japanese Series)*, 10.1537/asj.240220.
- Kobayashi K. (1967) *Journal of the Faculty of Science, the University of Tokyo, Section V*, 3: 107-162.
- Lovejoy C.O., Meindle R.S., Pryzbeck T.R. , et al. (1977) Paleodemography of the Libben Site, Ottawa County, Ohio. *Science*, 198: 291-293.
- 長岡朋人 (2010) 縄文時代人骨の古人口学的研究. *考古学ジャーナル*, 606: 25-28.
- 大橋駿 (2024) 地形情報システムから復元する縄文遺跡の分布と災害—想定を超える災害の予測を目指して—. 青森公立大学卒業論文.
- Suzuki H. (1969) *Journal of the Faculty of Science, the University of Tokyo, Section V*, 3: 279-309.
- 高橋好郎 (2023) 縄文の知恵から学ぶ SDGs: 持続可能な未来へ, 古代からのメッセージ. Amazon Kindle.
- Toynbee A.J. (1934-1961) *A study of history*. Oxford University Press, Oxford.
- White J.A., Burgess G.H., Nakatsukasa M., et al. (2021) *Journal of Archaeological Science*, 38: 103065.